

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

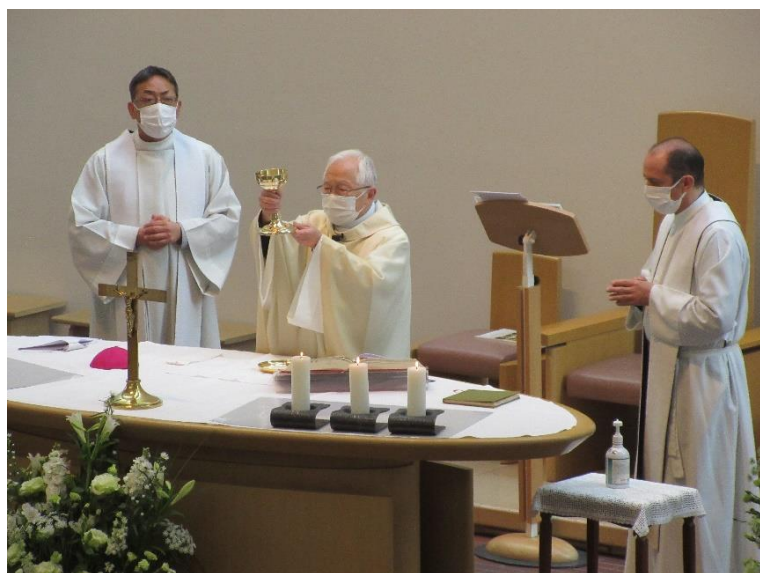
カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

「ニュースレター」として親しまれた本紙も、最終号を皆様にお届けする時を迎えました。3.11 のあの混乱の中で、第 1 号を出したのは、2011 年 4 月 30 日でした。第 1 号は「ありがとう。届いています」と皆様からの献金と支援物資が届けられていることをまず、感謝していますが、これは、10 年間ずっと続いてきたことでした。ボランティアとして、支援者として、ベースでの奉仕活動をとおして、全国の教会の皆様が被災地に目を注ぎ、いつも温かく支えてくださったおかげで、最終号・145 号まで続けることができました。仙台教区サポートセンターは 3 月 31 日で閉鎖されますが、各ベースでの支援活動は続きます。これからも、皆様のこれまで以上の支えが必要かもしれません。最後にもう一度、本紙の読者の皆様に心よりの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

3.11 東日本大震災 犠牲者追悼と復興祈願ミサ ～ともに 復興をめざして～

仙台教区サポートセンター Sr. 長谷川 昌子



10 年目の節目を迎えた今年の 3. 11。当初は、日本のカトリック教会が協力し合って、東日本大震災の復興支援活動をしたのだから、全ての司教たちに仙台へ来ていただき、カトリック元寺小路教会でミサをささげていただく、ということが決まっていた。ところが、一度発症者が収まりかけたように見えた新型コロナウイルスの変異株が現れ、再度、緊急事態宣言が発表されてしまいました。

昨年の 3. 11 の当日には、仙台教区の多くの教会ではミサが行われませんでした。その前の主日に、「東日本大震災と福島原発事故による犠牲者追悼・復興祈願ミサ」が各教会でささげられました。多くの被災者の方々は、県や市町村がおこなう慰霊祭に参加する方が多く、その後、お墓参りにいらっしゃった人が多かったようです。

10 年目の今年こそは、多くの司教様方がささげられるミサに、一緒に参加できると喜んでいらっしゃった方々が、残念ながら、再び新型コロナウイルスの感染者拡大によって、急きょ 3.11 のミサは非公開ミサになってしまいました。

しかし、3 月 11 日当日に、「3.11 東日本大震災 犠牲者追悼・復興祈願ミサ～ともに 復興をめざして～」が、非公開ながらささげられることになったのは、うれしいことでした。



当日は、平賀徹夫司教主司式、小野寺洋一、ホセ・ゴンザレス、李錫、フェルディ、フォン、佐々木博各神父が共同司式でミサをささげてくださいました。参列者がいないミサとはいえ、静かなオルガンの調べに合わせ、2 時半に入堂し、2 時 46 分までオルガンが流れる中静かに、祈りをささげました。2 時 46 分間の音に合わせ黙祷をささげた後、ミサが始まりました。

会衆がいないミサは、やはり寂しいもので、会衆がいてこそこのミサなのだという感を受けました。コロナ禍が収まった暁には、聖堂いっぱいの人であふれる場でミサに参加したいものです。

東日本大震災・福島第一原発事故から 10 年 わたしたちの 10 年・そしてこれから

仙台教区サポートセンター 濱山 麻子



3 月 20 日、仙台教区サポートセンター主催のイベント「東日本大震災・福島第一原発事故から 10 年 わたしたちの 10 年・そしてこれから」をオンラインで開催しました。

オールジャパン体制での支援は 2021 年 3 月を一区切りとなることは決まっていたので、昨年 2020 年は、節目である 10 年目に向けて、これまで、共に支援活動を続けてきた仲間、さまざまなところで出会った方々のことを振り返る時間がありました。たくさんの顔を思い浮かべながら、お一人お一人それぞれに、震災後の 10 年の歴史があり、思いがあることを感じたのです。ぜひ、それぞれの 10 年を、そして、これからどうしていこうと考えているかをご自身の言葉で語ってほしいと思い、この企画がまとまりました。

カリタス大船渡ベース ベース長の菅原圭一さんは、10 年前、大船渡で体験したことを克明に伝えてくださり、震災で失ったものと同じくらい、得たものも大きかったと話してくださいました。オリーブの会の野田和雄さん(八木山教会信徒)は、宮城県亘理町での支援活動について報告し、被災者と自分たち、教会の仲間、応援してくれる方、3 つの絆を支えてきたのは、祈りであったことを語ってくださいました。福島県いわき市から東京へ避難している鴨下美和さんは、社会から理不尽な差別や攻撃を受けてきた経験、そして変わらずに自分たちを支え、守っているのは支援者の祈りであることを話してくださいました。息子の高校 3 年生の全生(まつき)さんは、避難者への差別と現在のコロナ禍における感染者への差別が重なることを指摘しました。

教皇訪日の際のメッセージも改めて伝えてくださいました。カリタス南相馬 所長の南原摩利さんは、活動の中で出会った方々の言葉を紹介し、「子どもたちの未来のために、私たちができることは何か」と問いました。

カトリック中央協議会復興支援室担当の菊地功大司教様(東京教区)は、イベントの総括の中で「人の命がある限り、教会はそこで続いていく」と話しました。

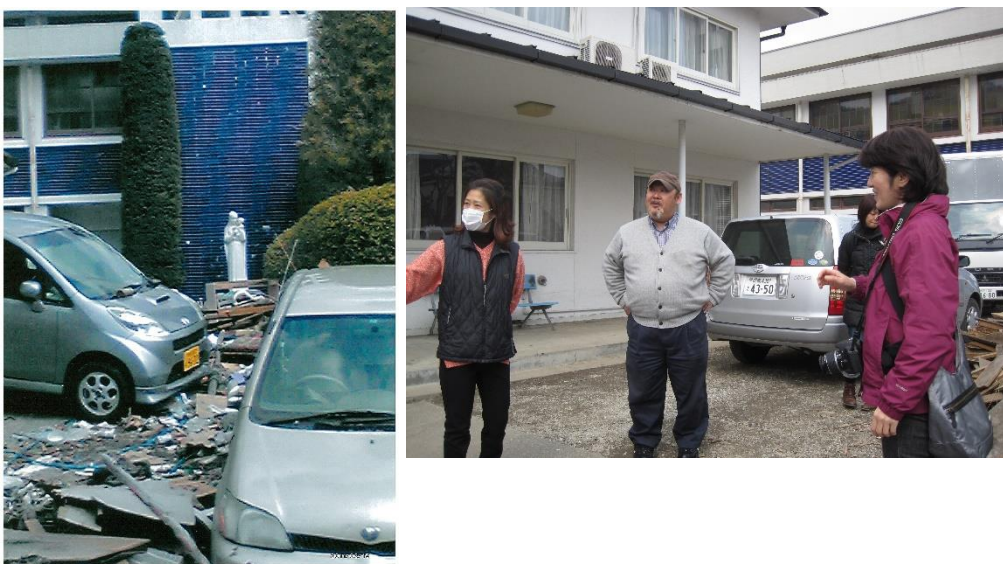
イベントの始まりと終わり、そしてお話の間には、イエスのカリタス修道女会のスモールクワイアのシスター方が歌ってくださり、静かな祈りのひと時を作ってくださいました。

5人の方のお話から、震災も原発事故も、現在進行形で続いていることを改めて感じました。組織としては10年という区切りをつけることがあっても、それぞれの場所での暮らしや人とののかかわりに区切りをつけることはできません。イベントをご覧になった皆様が、ご自身のこの10年をふり返り、今後もつながりを続けるきっかけにいただけたら幸いです。

ニュースレター最終号に寄せて

認定特定非営利活動法人 カリタス釜石
副理事長 伊瀬 聖子

先ず、感謝の意をお伝えいたします。これまで10年間、仙台から力強い後方支援を継続してくださった皆様に心より御礼申し上げます。表舞台で目立つことなく、しかし確実に支援してくださる頼もしい存在でした。この間、人々から理解されなかったり、困難なこともたくさんあったに違いありません。被災地の教区のだ真ん中に位置していたのですから、その業務は想像を超え、日々鳴りやまない電話と、あふれる情報とうわさ話との間で戦っておられたのだと思います。本当にお疲れ様でした。



釜石は、塩釜～石巻に続いて3番目のベースであったと記憶しています。3月の後半、何の準備もない被災した教会を仙台から訪ねて来られた時の印象は深く心に残っています。冗談に聞こえるかもしれませんが、TVドラマさながらに、苦境に立たされ心底困っているところに正義のヒーローがやって来て言うのです。「大丈夫だぞ！ 今から助けるから。みんな無事か？ 頑張れ！」なんて励ましてくれて。私は「やったー！ 助けが来たぞ。これで釜石は助かる！」なんて、心のどこかで荷が軽くなるのを感じていました。

戦いの本番は、実はそこから始まっていくことになるのですが、あの時点では想像もつかず、妄想と迷走のただ中で4月2日の開所の日がやって来ました。

釜石ベースの開所に私と一緒に携わった親友がいます。援助修道会の原敬子さん。音信不通となっていた私を訪ねるためにたくさんの支援物資と複雑な心境を背負って釜石のバス停に降り立った彼女の姿は勇敢でした。辺りは石灰が散布され、時々、風に乗って海水と何かが

混ざった異臭が漂っていました。その日から私の自宅に泊まり込み、ベースの開所準備に取りかかりました。時間割やボランティア作業表など、一緒に考えながら作っていました。原さんが釜石を去る道中、修女連のシスターに現状を必死に伝えていたことを後から聞きました。彼女が去って間もなくシスターズリレーが始まったことで、ベースの運営は見違えるように改善され環境が整っていきました。「シスターズリレー」は、まさにカトリック教会による復興支援が残した宝ものだと思います。すべてのシスター方に心より感謝を申し上げます。(援助会の山本紀久代さん、聖心の布教姉妹会の五十嵐悦さん、礼拝会の谷垣内幸子さんにスペシャルサンキューです)。

2011年から引き継がれてきたリレーは、2021年、新たな形で釜石ベースに花を咲かせようとしています。先が楽しみです。



大船渡ベースは、活動を継続します！

カリタス大船渡ベース ベース長 菅原 圭一

震災から10年が経ちました。あの津波の日の夜、妻の勤める幼稚園の園児たちと先生方に付き添って、避難先の市民文化会館へ行き、配布された毛布にくるまって、何度も襲ってくる余震のなかで漠然とした不安を感じていました。自宅は高台にあったため津波の被害を免れ、翌日に消防署に設置された衛星電話で仙台と東京にいる息子たちや親族の無事を確認した後は、被災した人たちの役に立とうと動き始めました。

電気も水道も止まった教会に泊まり込み、訪ねてきた外国の救援隊やマスコミの対応をしながら、教会周辺のがれきを片付け、近所の信者さんの半壊した家の泥出しや貴重品の運び出しを手伝い、避難所になった公民館に詰めたりしていました。教会の留守番を私に指示して、隣の気仙沼教会に行った會津隆司神父様から電話が来て、「もうすぐ濱口さんという人が教会に行くから、よろしく」とのこと。しばらくして濱口さんが到着。私の運転で、ベースの建設候補地を見て回りました。それが初対面でした。その後、神田裕神父様がいらっしゃり、そして多くのボランティアさん、神父様方、司教様方、そして大司教様までもが来ててくださいました。オールジャパンの体制で支援活動を展開してくださったカトリック教会。

大船渡ベースは大阪教会管区の支援を受け、それまでにほとんど交流のなかった関西の方々との交流が始まりました。そして全国からのボランティアさん。いろいろな出会いがあり、絆が生まれ、それがこの10年続いてきました。震災で失ったものはものすごく大きかったけれど、得たものはそれにも増して大きかった、と感じています。大船渡ベースは活動を継続します。新型コロナウイルス感染症の収束の折には、復旧復興を遂げた大船渡・陸前高田を体験しにぜひいらしてください。

カリタス大船渡ベースの4人のスタッフをご紹介します。では、一言ずつお願いいたします。

私の震災ボランティアは2011年の夏に始まりました。仙台教区サポートセンターへ申込書を送り、「どのベースに派遣されるのだろう？」とドキドキしました。派遣先は石巻でした。石巻には何回か行き、ボランティア活動の難しさや人と関わることの細やかさを学びました。

2012年からは大船渡へボランティアに通い、2015年からスタッフとして活動しています。2015年はちょうど活動の転換期でした。各種依頼対応中心の活動から、見守り訪問や地域の方々がほっとできる場を提供する活動に重点が置かれ、お一人お一人を近くに感じる活動になりました。

時期を同じくして、スタッフは地元の方が増え、ケセン語が飛び交い、大船渡の暮らしや気質をより知るようになりました。現在は自分1人県外スタッフです。

被災体験はスタッフによって異なり、ある意味、大船渡の社会の縮図のように思います。被災体験がそれぞれ違う人々が互いに思いやり、気遣い合い、この10年暮らしていることを地元スタッフから学びました。その違いは時に見えない壁になりかねませんが、それを解消する1つは大船渡へ思いを寄せる方々との関りです。

大船渡の人の温かさ、景色、風習、食べ物など大船渡の魅力に遠方から来た人たちは癒やされ、励まされ、何度も訪れました。地元では当然のことで、何がいいのかわからないようですが。

地域の方々と大船渡へ思いを寄せる方々との橋渡しをこれからも続けていきたいです。

仙台教区サポートセンターは各ベース間の取りまとめを陰に日向にしてくださり、カリタスの横のつながりを育んでくださったことを心から感謝申し上げます。そのつながりを大切にしていきたいと思っています。

大河内 愛



あの日、生まれ育った大船渡で震災に遭い、津波による被害で故郷の景色も今までの日常も一変しました。

それから5年。縁あってカリタス大船渡ベースのスタッフになり、活動を通して大船渡の被災者から生の声を聞き、全ベース会議で訪れた福島原発や宮城の大川小学校を直に見学する事ができたことは、報道だけではわからない現実を知る機会となり、衝撃とともに心に残りました。また、神父様やシスターをはじめとする教会関係者の方々との出会いや教皇様にお会いできたこと、東京ドームでの5万人ミサに参加できたことは、本当に感動的で夢のような出来事でした。

辛く悲しい事もたくさんありましたが、同じくらい心が救われる温かい気持ちを全国の皆さんからいただいています。これからも皆さんと心をつなげて活動していきたいと思っています。

休石 千枝

東日本大震災後、訪問活動を通じてたくさんの地域の方々と知り合うことができました。

最初は警戒されたりもしましたが、今では「そろそろ来る頃かと思っていたよ、入って、入って、お茶飲んで」と自慢の漬物やお菓子な

どを並べてもてなしてくださる方、訪問を楽しみにしてくださっている方、自分のことを気にかけていてくれることがうれしいとおっしゃってくださる方等、ずっと前から知り合いだったような、親戚の家に来ているかのようなそんな温かさを感じ、訪問している私自身も支えられているような気がします。

出会えた喜びより辛いお別れもたくさんありました。話したことや笑顔等思い出を胸に、これからも地域の方々に寄り添い、出会いを大切に活動を続けていきたいと思っています。

今井 久美子

陸前高田で津波の被災を受けた私は、10年目という言葉聞くたびに、あの悲しみがこみあげてきます。

あの私たちの流してきた涙を全て集めたら、すぐ足元に広がっていたあの海の水と、どちらが多いのでしょうか。

壊滅と言われた町で私はまだ生きている。置いていかれたという気持ちは今も、多分これからも消えることはないのかもしれないと思います。

3月。あっちこっちで、抑えきれずにこぼれ落ちる思いがしみいる。思い出は全て土の下深く。それでも私たちは、ここにいる。

絶望の中にも、たくさんの祈りがあったことを知りました。悲しみ、苦しみ、痛みを分け合い、誰かを思い、誰かのために祈る。カリタスでの活動を通して、その優しさと力強さに触れることができました。寄り添い、支え続けてくださった皆様に、心より感謝いたします。そしてどうかこれからもともに、お祈りくださいますように。

菅野 文江



震災から10年「忘れてないよ…」
～前に進むための節目となるように～

カリタス南三陸ベース 千葉 道生

「3月11日が近づくと心がざわざわする」「何か落ち着かないんだよ」「この時期ばかり取材に来てさ」。これらは南三陸町でよく耳にする声だ。震災から一人一人の心の中で毎年思い起こすことがあるのだろう。

自然と共存しなければ生きていけない場所で、今度はウイルスとも共存していかなければならなくなった。「災害が起きて気付かされることがある」と南三陸町の方たちはたくましい。地域のつながりの大切さや、当たり前前の生活が当たり前でなく今生きているだけでどれだけ素晴らしいか、身をもって体験しているからだ。暗闇の中で遙か先の光を見据えていこうとする時に、すべてを失った場所だからこそ見えてくる揺るぎないことがある。

一方で独居のお婆さんを訪問すると「もう長生きしたくない」と、津波で流され今でも行方不明の息子の遺影の前で悲しい顔をしている。「イタコに頼んでみたけどどこにいるのか分からない」と言う。お茶っこではいつも明るく振る舞っていた彼女が心の中では忘れる事

のできない悲しみを抱えていた。10年経って初めて聞かされるそんな心の声を聞かされた時に、失った家族への思いは消えることはないと感じ付かされる。だが無常には時は流れ、大都市の中を歩くと東日本大震災に関心を持っている人がいる事は奇跡ではないかと思うほど、平和な日常を感じる事もある。そんな中、今でも北海道、関東、関西、九州からボランティアの申し込みが来ると今は新型コロナの影響で受け入れられないが、その気持ちだけでとてもうれしい。「忘れてないよ…」そんな思いに支えられて続けていくことができた。震災直後には多くのボランティアさんが来てくださった。そして10年経ち、今は一人のボランティアさんが現場にいただけで寒い東北の冬がとても温かい雰囲気になる。東北には「ありがとう」という言葉を心から分かち合える場所が生まれ、今でもささやかに続いている。そんなみちのくの地で生まれた縁こそが、関わる全ての人にとって「天国に積んだ富」となっていた。ここは地上だが天の国に近づいていた。

10年という節目の年、区切りをつけていくことは前に進むためには悪いことばかりではない。

だからこれからも「天国への富を積んでいける場所」が広がっていくように、南三陸社協の方からいただいた言葉を紹介したい。

「多くのご支援に感謝し、“今”があることを忘れず、これからも生きてかった人たちの分まで、南三陸町の地域住民みんなで前を向いて歩いていきます」。



東日本大震災から10年が経ちました

一般社団法人カリタス南相馬 所長 南原 摩利

東日本大震災から10年。そして私が南相馬市で活動するようになってから8年になります。名古屋の聖霊病院で看護師をしていた私が一度も訪れたことのなかった東北の地に足を運ぶようになったのは全て神様の導きだったと感じています。

震災後、仙台サポートセンターに初めて訪れ、被災地に向かったことを鮮明に覚えています。塩釜ベースでの活動に参加。女性は、御聖櫃（ごせいひつ）のある聖堂内、男性はその隣室で宿泊しました。大切な祈りの場所を提供くださった塩釜教会信徒の皆様へ感謝の思いでした。その後、釜石、大船渡ベースでの活動に参加。夕の集いの中で活動の感想とともに全国から集まったボランティアの方から被災地に足を運んださまざまな思いを聞く時間は、とても新鮮でした。

2013年に初めて原町ベースでの活動に参加。被災地の現状を見た時にあぜんとしました。原発事故による影響があまりにも甚大で、仮設住宅において孤独死も続いている状況を知ったからです。その後、名古屋の病院を退職し、福島で働くことを決めました。

原町ベース時代からカリタス南相馬における活動の中で特に印象に残っている活動は、原発事故により戻れなかったご自宅の片付けですが、避難指示解除後にお店を再開し笑顔で迎えてくださった時には大変感動しました。当時活動に参加したメンバーの名前を刻んだ木の板

を今も大切にお店に飾ってくださっています。また、仮設住宅の頃からサロンで一緒にいた方から、「カリタスさんのおかげで全国の皆さんとお知り合いになれて、今も心の支えになっている」とおっしゃっていただけた時は大変うれしかったです。

サロン活動や子ども会、夏祭りのイベントなど活動を通して楽しかった思い出、うれしかったことは書き切れないほどありますが、活動を通して得た一番大きな宝は、全国から来られるボランティアの皆様、原町教会信徒の皆様はじめ地域住民の皆様、活動を支えてくださっている全国の皆様、一人一人とのつながりです。皆様からの励ましと笑顔によって日々の活動に力をいただいております、つながりに感謝するばかりです。こうしたつながりを支えてくださった仙台サポートセンターの皆様へ心から感謝いたします。このつながりを無駄にしないためにもカリタス南相馬は、今後も活動を継続してまいります。コロナ禍にあって人と交流する機会は激減していますが、1日も早くまた以前のように全国の皆様と活動を共にできる日が来ますよう祈っております。感謝のうちに…



「試される信者の力」～自分勝手に振り返って～

旧・もみの木ベース長 朝尾 光二(さいたま教区)

日本全国は元より、世界中の支援を受けた日本のカトリック教会が展開して来た東日本大震災被災者支援活動も2021年3月で一つの大きな区切りを迎えました。

私が、さいたま教区のいわきサポートステーションもみの木でベース長として活動した期間は2014年4月から仮設住宅提供が原則終了となった18年までの4年間でした。この間、さいたま教区内の小教区等からボランティア活動に参加する信徒と共に仮設住宅の集会所を会場として出張カフェ(お茶っこ)を展開してきました。18年5月からは、地元のいわき教会有志の方々と「カリタスいわき(仮称)」と称して、月に一度ではありますが、2カ所の復興公営住宅を訪問してきました。



私がこの活動に入ったのは、1995年1月17日の阪神淡路大震災の発災当時、俗に言われる働き盛りの年齢で、忙しい部署で働いていたこともあり、阪神のボランティア活動に参加できずにいたことにより。教区事務所からはボランティアに行けないかと何度となく連絡を受けていましたが、ついに一度もボランティア活動に加わらなかったことが心に残り、一種、負い目のような気持ちを持っていました。そうは言っても、東日本大震災発災後直ちに行動が起こせたわけでもなく、仕事にも飽きてきていた2013年に教区事務所に意思表示して2014年から福島いわきに入りました。

2014年になると、活動は主に傾聴のための出張カフェ活動でしたので、1週間のもみの木での活動を終えて、毎週金曜の夜には上智大学のカウンセリング講座を受講し、自分なりに「人の心に土足で踏み込まない」ための心得を学びに行ったのですが、ついつい、軽口をたたく生来の性格もあり、全くモノに成りませんでした。

そこで助けていただいたのが、教区内小教区から参加されてくるボランティアの皆さんでした。私は、道具を運搬して、会場でコーヒースァエ入れていれば、他はボランティアさんが話を聞いたり、楽しい催しや話題を提供したりして、訪問先の皆さんを和ませてくださいました。私にとって、2014年から現在のカリタスイワキまでの活動は、学習講座を超えた大きな学びを感じるものでした。

偉そうに言えば、それは、「信者の力」のような物です。司祭であれ、信徒であれ、誰でも信者としての使命の様なものを持っていらっしゃるんだな～と感じさせられる場面が年に一度や二度はあるのです。

どんなことも、どこかで区切りをつけて現状を整理し、今までやって来たことを振り返らないと、変化した条件下で次に何ができるか、休止なのか終了するののかも含めて、対応が考えつかない様に思います。信者として、被災された方々に何らかの力添えをしたいという気持ちを持っている方は大勢いらっしゃるでしょう。

これからどんなことができるのか、ヒントを探しているところです。

愛ある人々と出会い続けた10年間

CTVC-カトリック東京ボランティアセンター事務局長
漆原 比呂志

10年前、仙台に向けて出発したのは3月18日でした。東北自動車道が緊急車両以外通行できなかったため、新潟経由で仙台に入りました。元寺小路教会に入ると、成井大介神父様（当時）が一言、「さあ、どうしましょう?!」。とりあえず2階の奥の部屋で机をくっつけ、パソコンを置いてサポセン事務所が立ちあがりました。やるべきことをびっしりとホワイトボードに書き込み、集まってきた物資を整理し、鳴りやまない電話に應對し…。当時入手困難だったガソリンを持ってきたことを小松史朗神父様に告げると、すぐに自分の車に給油して、被災地に向けて走り去っていきました。第1陣のボランティアチームがさいたま教区や東京教区から到着し、塩釜や石巻、釜石の教会に送り出します。夜は1階の会議室に積みあげられた支援物資のダンボールの山の谷間に沿って、寝袋で寝ますが、ほぼ毎晩余震で起こされました。10日あまりは、全く風呂に入れない状況でした。

このような体験から東北での活動が始まりました。連日、朝から深夜まで身体も頭も動かしっぱなしの状況の中で、私にチカラを与えてくれたのは被災地の方々のお心遣いでした。電気も水道も止まり、おまけに他県から来た私たちボランティアたちに占拠されている塩釜教会に、そっと、地元の信徒の方々が野菜や果物を届けてくださってい



ました。ご自身が被災され、大変な思いをされている中で、どれだけ温かい心を向けてくださっていることが、じんわり感じました。

その後、CTVCでの私の担当は福島県各地となりましたが、そこでは地元の方々が中心となり、被災者や避難者の方々の支援をされていました。お茶によるもてなしや、傾聴、子どもの場づくり、料理の集い、季節のイベントなど、形はさまざまでしたが、どの活動も「関わる」ということが最も大切なことだったのだ

と思います。そして、そのような活動の場面に一緒にいさせていただき、強く感じてきたのは、関わりの根底に流れている深い愛です。被災地での支援活動の現場でも、それを後方から支える活動においても、愛ある人々、愛にあふれた人々に出会い、そのつながりはどんどん広がっていきました。

考えてみれば、被災地支援に関わり始めた瞬間から今までの10年間ずっと、この愛ある人々に出会い続けてきたような気がします。東日本大震災のみならず、今後いかなる災害や困難があったとしても、この愛ある人々がこの世の中に存在しているという事実が、私たちをこれからも励まし、勇気づけていくことでしょう。この愛ある人々の輪を広げ、必要とする人々につなげていくことこそが、私たちの使命なのではないかと思います。このような気づきを与えてくださった、被災地の方々、ボランティアの方々、協力者の方々に心から感謝です。



コロナに負けない傾聴をめざして

オリーブの会 野田 和雄

「コロナ感染防止のため東北大学は部活を休止します。落語研究会は学生を派遣できません」。こんなメールが入ったのがオリーブの会開催予定の2週間前です。さっそく、亘理教会の長嶋会長に代替案の相談をしました。「野田さん、知らないの?」「……」「落語がダメだったら、と、次は折り紙でひな人形づくりをする準備を八木山でやっているヨ」。

9年もボランティアを続けているとスタッフの多くが「なんとかなる」と思っている。予想外のことがあってもあわてず騒がず、次の用意を始めるようになっていました。自分の役割をやっていると、チームの一人一人がどこまでやれるのかも分かってきます。スタッフのチームプレーが自然にできるのが、10年の歳月の積み重ねの恵みだと思います。



2月24日、亘理教会に集まった人たちは、落語が中止と知り少し残念そうです。孫のような年頃の学生たちとの話は、楽しい思い出がいっぱいです。それでも震災の苦労をくぐり抜けてきた人たちは、すぐに気持ちを切り替えて折り紙のサンプルを見えています。

いつものように「新型コロナウイルス感染症に苦しむ世界のための祈り」を唱えてから始まります。津波被災者が教会の聖堂で手を合わせて祈る姿に、オリーブの会の絆を感じます。

折り紙でひな人形を作るのは思ったより難しく、女性たちは苦労しています。スタッフが丁寧に手伝う姿に寄り添いの経験を感じます。男性たちは囲碁、将棋に時を忘れ、こちらは真剣勝負です。台所では亘理、八木山のベテランシェフがおでん作りやケーキのラッピングをしています。今日のテイクアウトはおにぎり、おでん、ケーキの詰め合わせです。

被災者リーダーからの申し入れがあり、数年前から材料実費を参加費として受け取っています。300円は各々のグループ、被災者・ボランティアのリーダーが集金します。実費は払わないと参加者の気が済まないとのこと。いつまでも被災者ではない、という自立の心を感じます。

折り紙ができた人からハイポーズ。笑顔の写真は次回のオリーブの会でプレゼント。写真の一部はオリーブの会のために祈り、ご支援くださる教会にも送ります。笑顔が祈り・支援となりまた笑顔になる。教会と被災者の愛のループをつなぐのがオリーブの会の役割です。笑顔が祈りを支え、愛の奉仕が笑顔を作る長い間のくり返しがおリーブの会を支えてくれます。それは小さなカリタスのようです。

オリーブの会はコロナに負けない傾聴を目指して続けてゆきたいと願っています。これまでご支援くださった全国の教会、修道会の愛の奉仕に心から感謝します。



カリタスの支援活動の区切りとして、仙台教区サポートセンターの復興支援活動ニュースレターも終了すると知り、私は困っています。笑顔が届けてくれるのにニュースレターがとても役立っていました。被災地の情報発信をどのように続けてゆくのか？被災者の笑顔や寂しさをどうやって共有し、祈りの力に変えてゆくのか、仙台教区の宿題だと思っています。

最後にニュースレターの編集に毎回ご尽力いただいた仙台教区サポートセンターのスタッフに心より感謝します。

仙台教区サポートセンター活動終了 これまでの出会いに心からの感謝を込めて

仙台教区サポートセンター



2011年3月16日に始まった仙台教区サポートセンターは、2021年3月末で10年間の活動を終了いたします。

この10年間は、たくさんの出会いの連続でした。大きなリュックサックを背負ってきてくださったボランティアさんも、「これしかできませんが、ずっとお祈りを続けています」と電話をくださる方も、被災された方に使ってほしい、と毛糸や折り紙をそっと持ってきてくださる方もいらっしゃいました。さまざまな形で、日本国内のみならず世界中から届いたのです。出会った方と被災地を、出会った方と出会った方を、つなぐことが私たちの役割でした。至らずに、ご迷惑をおかけしたこと、ご心配をおかけしたことも多くありました。それでも、これまで共に歩んでくださった、カリタスベース、全国からのボランティア、支援者の方々、仙台教区の皆様、元スタッフ…すべての方へ、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。仙台教区サポートセンターのスタッフは、これからそれぞれの場所で、できることを続けてまいります。

カトリック仙台司教区の直轄であるカリタス石巻ベースは、カトリックの国際ボランティア団体「心の港」と、日本基督教団の支援組織「東北ヘルプ」のお力を借りて、仙台教区が活動を続けていくことになりました。ベース1階のオープンスペースについては、コロナ禍のために休館を続けていますが、感染拡大が収束しましたら、必ず再開すべく準備を進めています。地域の方々からも、再開を待ち望む声があがっています。石巻ベースの近況につきましては、ベースのブログとFacebookで発信されます。どうぞこれからも心を寄せていただきますようお願いいたします。

また、最後に「カリタスみちのく」のお知らせです。今後も、支援活動をきっかけにつながったご縁を断ち切らず、さらに広げていけるようにと、カリタスベースとサポートセンターのスタッフ有志により「カリタスみちのく」というネットワークが立ち上がりました。カリタスベースやグループ同士の情報共有、全国への情報発信を行います。東日本大震災に限らず、さまざまな地域での支援活動についても情報発信をしていきます。「カリタスみちのく」のFacebookをインターネットで検索していただき、ぜひつながっていただけたらと思います。

つないだ

10年



つながる

「これから」

カリタスみちのく：cmichinoku@gmail.com